

アレクサンダー・フォン・フンボルトにおける植物観相学について Alexander von Humboldt on the Physiognomy of Plants

石田 三千雄

はじめに

われわれはこの論文で、アレクサンダー・フォン・フンボルトの「植物観相学」について論じる。フンボルトは非常に広範な学問分野に通じていた知の巨人であり、最後の博物学者の一人であり、偉大な探検家、地理学者、また自然科学者でもあった。フンボルトは書齋の学者ではなく、探検旅行家でもあった。その学術探検旅行の成果は数々の著作となって現れた。マイヤー・アービヒによれば、フンボルトの旅行はいつでも固有の哲学をもっていたのであり、その中に置かれた認識理想は決して見失われることはなかった。アービヒはそれを「大地の哲学」(Philosophie der Erde)と呼んでいる。フンボルトにおいてのみ、地理学は哲学となったのであり、哲学は地理学となった¹。

フンボルトは「植物観相学」を「自然の観相学」として構想している。フンボルトの植物観相学は、人間の顔からその心を読み取るラヴァーターに代表される観相学の系列にあり、その拡張である。フンボルトの自然の観相学は、人間に対して現れている自然を、いわば地球(大地)の顔、相貌として捉える²。その際、地球は、フンボルトにとって、植物相や植生という形態を取る植物被覆として地域ごとにさまざまな相貌を呈する。フンボルトの植物観相学は、地球の地域の特徴を植生から明らかにするものであり、植生を形態として記述し、またその美の享受を論じるものである。

フンボルトには晩年の大著『コスモス』に結実する、コスモスとしての自然を明らかにしようとする強い情熱があった。フンボルトの自然の研究は自然の享受と一体である。自然享受(Naturgenuß)は特に植物が大きな役割を果たす風景においてなされる。フンボルトはこれに関して、次のように述べている。「植物が群落をなして、平野を一様に覆い、はてしない彼方まで眺めのきくようなところ。海の波が岸辺を穏やかに洗い、緑の海草類が波の打ち寄せた跡を物語っているようなところ。このようなところではどこでも自由な自然の感じ(Gefühl der freien Natur)、いいかえれば、内にある永遠の法則に従って自然が成立しているという漠とした予感

¹ Meyer-Abich, Adolf, Nachwort zu "Alexander von Humboldt, *Ansichten der Natur*" (hrs., von Adolf Meyer-Abich), Stuttgart 1969, S.155.

² 「顔」という言葉が非常に拡張されて、いわば比喩的に使われる例は、地質学や地理学において見られる。たとえば、地質学者のエドゥアルト・ジュースの著作に『地球の相貌「顔」』(Eduard Suess, *Das Antlitz der Erde*, Prag・Wien・Leipzig 1885-1909)がある。他に筆者の目にした例としては次のものがある。Michael Dettelbach, *The Face of Nature: Precise Measurement, Mapping, and Sensibility in the Work of Alexander von Humboldt. Studies in History and Philosophy of Biological and Biomedical Science* 30, 1999; SueEllen Campbell, with Alex Hunt, Richard Kerridge, Tom Lynch, and Ellen Wohl, *The Face of the Earth. Natural Landscape, Science, and Culture*, Berkeley・Los Angeles・London, 2011.

が心の中へ浸透していく。このような心を引き立たせるものの中には一つの神秘的な力が宿っている³。特にフンボルトは地方がもつ「個性的性格」(individueller Charakter)を明らかにしようとし、これはわれわれの地球表面の相貌的な形態(physiognomische Gestaltung)から得られる⁴、と考える。フンボルトは自然の風景をたとえば、次のように述べている。「ここで雄大な自然の風景に関する私個人の回想にふけることが許されるならば、私が今も心にとどめているのは、熱帯の穏やかな夜に、大洋が天蓋にかかる惑星のまたたきもしない光をゆるやかにうねる波の面にうけている風景であり、コルディエラの森林におおわれた谷で、丈の高いヤシの幹が力強く下の木の葉の屋根をつきやぶって、あたかも柱廊のようにそびえ、森林上森林を架すの観を呈している風景であり、あるいはテネリフェの峯に雲が長くたなびいて噴石丘を下界の平野と分かち、突如として上昇気流が作り出した一つの雲の隙間を通して、火口の縁から眺めれば、ブドウに飾られたオロトヴァの丘と海岸の果樹園まで低く見渡せるあの光景である。これらの光景にあっては、心を動かすのはもはや自然の静かな創造的生命ではなく、われわれに呼びかけるその穏やかな営みと作用ではない。それは、風景の個性的性格、たとえば雲と海と島の朝靄の中にかすむ海岸の三つが渾然と融合しているさまである。それは植物型(Pflanzenformen)の美であり、その群落をなしていることによる美である」⁵。フンボルトの植物観相学は、このように植物が大きな役割を果たす風景観相学である。

以下で、われわれはまず観相学の特徴を概観し、次に観相学の概念の革新を企て、ゲルノート・ベーメを参考に、新たな観相学を構想する。新たな観相学において雰囲気が鍵となる概念になること、フンボルトの植物観相学はこの新たな観相学の試みの一つであることを指摘し、その後フンボルトの植物観相学の特徴とその思想的背景について論じる。

1. 観相学概念の革新とその新たな展開

「観相学」(Physiognomik)は、古代ギリシア以来、ルネサンスを通じて、ヨーロッパの知の底流をなしてきた知の一形態である。観相学は、近代において、ヨハン・カスパー・ラヴァーター(Johann Caspar Lavater)において、歴史の表舞台に登場し、18世紀の多くの作家たちの心を捉え、賛否両論をヨーロッパ中に引き起こした。ラヴァーターは観相学を、「人間の外面的なもの(das Aeußerliche)を通じて彼の内面的なもの(Innres)を認識するという技(Fertigkeit)」、「直接には感覚されないものを、何らかの自然の表現〔表情〕(ein natürlicher Ausdruck)によって読み取るという技」⁶、と述べた。他方、リヒテンベルクは、ラヴァーターが主張するような

³ Humboldt, Alexander von, *Kosmos. Entwurf einer physischen Weltbeschreibung*. Herausgegeben und kommentiert von Hanno Beck. Darmstädter Ausgabe, Band VII/1, Darmstadt 2008, S.15.

⁴ Ebenda.

⁵ A.a.O., S.16.

⁶ Lavater, Johann Caspar, *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*, Band I. Leipzig und Winterthur 1775, S.13. ラヴァーター観相学の問題点に関しては、筆者の論文「ラヴァーターにおける顔の記号学—ラヴァーター観相学の背景とその射程—」『シェリング年報』第19号、2011年および「ラヴァーター観相学の構想とその問題点」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第18号、2010年を参照されたい。

観相学を「あるかなり限定された意味」のものだと考え、それを「もっぱら心情の動き (Gemütsbewegung)の一切の一時的な徴候(Zeichen)を除いて、人間の身体の、主要には顔の外的部分の形と性質から、精神と心の性質を見出すという技」⁷ であるとする。これに対してリヒテンベルクは「情相学」(Pathognomik)という新たな観相学を提案する。これは段階や混合を含む、「情緒の記号論(Semiotik der Affekten)全体、すなわち心情の動きの自然的な徴候の認識」⁸ である。そして彼はこの両者を含んだ学として観相学を考え、観相学を一般的な表現のために受け入れるのがよいだろうと⁹、と述べる。われわれも観相学をこのリヒテンベルクのように広い観点で考えたい。観相学の革新を考えるならば、心情、感情を積極的に取り入れることは当然であろう。

ゲルノート・ベーメは、歴史的に伝承されてきた観相学に含まれる問題点を指摘し、観相学の革新を企てる。G.ベーメは、観相学の根本前提に関わる問題点を挙げている。それは、内と外、人間の内面とその外的な現われ、性格と表現、本質と現象は異なる、という前提である。観相学は外的なものから内的なものを、現出から本質を推論しようとする。そのために、観相学は、内的なものは何らかの仕方で外的に示されることを前提とせざるをえない。ところが他方では、観相学がそもそも必要とされるのは、内的なものが隠されていて、表に示されない場合でしかない。ベーメによれば、この矛盾が観相学の歴史を突き動かし、その賛否を議論する動機を与えてきた。彼はこの矛盾を、一方での内的なものとの外的なものとの分離と、他方での「自らを示すこと」と「自らを隠すこと」との弁証法とも述べている¹⁰。

ベーメは、このような批判には該当しない別のタイプの観相学を目指す。この新たな観相学において問題となるのは、現象の背後にある性格ではなく、まずは「相貌」(Physiognomie)そのもの、性格特徴そのものである。このタイプの観相学は、彼によれば「現象の背後を探るな、現象そのものが教えてである」という格率で表されるような、ゲーテの思想に由来するような観相学である。ベーメによれば、ゲーテは、現象の膨大な多様性とその発生条件の変異を比較することで、一連の現象の「原型」(Grundmuster)を見つけ出し、それを「原現象」(Urphänomen)と呼んだ。もっともよく知られているのは、ゲーテの「原植物」(Urpflanz)であり、植物すべての成長一般の一種の根本形態である¹¹。

ゲルノート・ベーメはフンボルトの植物観相学を、新しい観相学の試みの一つと見なす。ベーメはフンボルトの植物観相学について次のように述べている。アレクサンダー・フォン・フンボルトは『自然の眺望』の中で「植物観相学」を構想している。フンボルトは、自らの大がかりな学術探検旅行の経験、とりわけ中南米旅行の経験によって、自然の形態の豊かさはゲー

⁷ Lichtenberg, Georg Christoph, Über Physiognomik; wider die Physiognomen. *Zu Beförderung der Menschenliebe und Menschenkenntnis*. in: Lichtenberg, Georg Christoph, *Schriften und Briefe*, Band III, München 1972, S.264.

⁸ Ebenda. リヒテンベルクの情相学については上記の筆者の論文「ラヴァーター観相学の構想とその問題点」も参照されたい。

⁹ Ebenda.

¹⁰ Vgl. Böhme, Gernot, *Asthetik. Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre*, München 2001, S.107. ベーメ自身は二つの批判的を挙げているが、ここではわれわれの論点に関わる限りの第一の批判点のみを挙げる。G. Böhme, *Atmosphäre. Essays zur neuen Ästhetik*, Frankfurt am Main 1995, S.132.

¹¹ Vgl. Böhme, G., *Asthetik*. S.107-108.

テが試みたような一つの根本形態でとらえられるのではなく、根本形態の多様性が必要である、という結論に到達した。こうして彼は、「成長形態」(Wuchsform)についての16の類型をその著作「植物観相学の理念」の中で記述した¹²。ベーメによれば、ここで風景的なものの根本形態を記述すること、風景的なものの多彩さを自分の旅行経験に基づいて拡張させることが問題であった。しかし、彼がここで或る風景が有する「性格的なもの」(das Charakteristische)を明らかにしようとするとき、彼にとって重要なのは、見えているさまを再現することではなく、彼がこのように見ることに於いて経験した「さまざまな印象」を伝達することであった。重要なのは、「精神的なものに対する感覚的なものの関係」である¹³。精神的なものを、「自然の魔力」とか、或る特定の風景を見ることで伝達される「気分」(Stimmung)と呼ぶことによって、アレクサンダー・フォン・フンボルトは伝統に抗して、観相学が眼差しを向ける方向を根本的に変えた、とベーメはみる。フンボルトにおいて性格、たとえば或る風景の性格について語られるとしても、現出の背後にある何かはもはや問題ではなく、現出に即して経験されうる何かの問題である。ベーメによれば、フンボルトは風景の性格を「雰囲気」(Atmosphäre)として語っている。彼の自然記述はこの意味で観相学であるがゆえに、彼は自然科学の内部で絵画に、とりわけ風景画に一つの役割を帰する¹⁴。

ベーメは新しい観相学を形成する端緒の決定的な点を、観相学が美学の構成要素という資格を得て、もはや占術の一部門とみなされないこと、より現代的に言えば、記号論の一部門ともしやみなされない、ということに見ている。つまり、相貌の諸特徴は、内に隠されている性格を指示する記号だとは理解されないということである。むしろ相貌の諸特徴は、「現出における性格」(Charakter in der Erscheinung)を感知可能にさせる産出者(das Erzeugende)であると把握される。ベーメは、新しい観相学で問題となる性格を、演劇で俳優が演じる性格を手がかりに論じる。俳優が舞台上で演じる性格は、その俳優自身の性格ではなく、その俳優の相貌的な特徴、身振り、話し方などによって感知可能となる性格である。つまり、性格は「現出における性格」にすぎない。俳優が身につける仮面もしくは俳優である人物は、或る性格の表現ではなく、性格を産み出すものである。それゆえ、或る人間、或る風景あるいは或る事物がもつ相貌は、新しい観相学においては表現として理解されるのではなく、それに敏感な誰かに、或る一定の印象を与えうるようなもの、つまり印象ポテンシャル(Eindruckspotential)として理解される¹⁵。

しかしながら、そのことによって性格特徴がまた内なるものの表現でもありうること、そして或る人間の「しぐさ」(Mimik)がその人の感情の動きや気分の記号でありうることが否定されるべきではない。日常のコミュニケーションでそのような解釈が指示されることにかわりはなく、その限りでは古典的な意味で観相が行われる。しかし、ベーメが唱える観相学は、内的なものに向かう軽率な推理に待ったをかけ、誰かあるいは何かがその観相学的な特徴に基づいて

¹² Vgl. Böhme, G., *Asthetik*. S.108; G., Böhme, *Atmosphäre*, S.143.

¹³ Vgl. Böhme, G., *Asthetik*. S.108.

¹⁴ Vgl. a.a.O., S.108-109.

¹⁵ Vgl. Böhme, G., *Asthetik*. S.110; G., Böhme, *Atmosphäre*, S.134-135.ベーメはこのように、相貌を現れているがままの性格を生み出すものとして捉える。そうすると、通常いうところの記号や表現は観相学から排除されることになる。しかし、それは新しく捉え直された記号や表現を提示することにもなる。

自分の周りにあるもの、つまり一定の印象をつくるという疑いえないものを確認する。重要なのは、誰かが放つこの印象、この雰囲気なのである¹⁶。

しかし或る人物が放つ雰囲気あるいは或る事物、たとえば或る芸術作品が放つ雰囲気と「風景の相貌」(Landschaftsphysiognomie)に関わる雰囲気とは性質が異なる。前者では、その相貌を雰囲気の産出者と名指すならば、それによって同時にわれわれは雰囲気が発せられるその場所を名指すことになり、雰囲気は遍在しない。これに対して、後者では、雰囲気は空間を包み込むが、中心をもたない¹⁷。

G.ベームが提唱する新しい観相学によれば、或る相貌が示す諸特徴は何かを表現するのではなく、雰囲氣的に経験される印象に対する印象ポテンシャルを示すのである。それによれば、表現について語ることも再び許される。ただしそれは、表現が内なるものの「顕現」(Manifestation)として理解されるのではなく、それが居合わせていることの空間の中に何かが登場するといった、分節化された仕方として理解される場合に限られる。その場合には、より一般的な意味で植物の相貌や風景の相貌についても語られるはずである¹⁸。

2. アレクサンダー・フォン・フンボルトの「植物観相学」

われわれはここで、フンボルトの「植物地理学の理念、熱帯地域の自然画付き(1807年)」(Ideen zu einer Geographie der Pflanzen nebst einem Naturgemälde der Tropenländer)¹⁹と「植物観相学の理念(1806年)」(Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse)の二つの著作の内容を検討する。「植物地理学の理念」(元のフランス語の題名では「植物地理学試論」)は、フンボルトが1799年から1804年にかけて行なった、アメリカ大陸の研究旅行の成果として刊行された30巻にのぼる『新

¹⁶ Vgl. Böhme, G., *Asthetik*. S. 110. このときベームによれば、雰囲気はその存在論的地位に関して未規定的である。雰囲気を、そこから雰囲気が発している諸客観やもろもろの環境に帰すべきなのか、それとも雰囲気を経験する諸主観に帰すべきかは、よくわからない。雰囲気は何らかの仕方で感情の調子(Gefühlston)を伴った空間をおぼろに満たすように思われる。Vgl. G. Böhme, *Atmosphäre*, S. 22.

¹⁷ Vgl. a. a. O., S. 111.

¹⁸ Vgl. Ebenda. 筆者は、ラヴァーター観相学を、ベームのいう新たな観相学と同じ方向で、新しい記号学や解釈学として解釈し直すことが可能であることをすでに示した。ラヴァーター観相学を神学的な前提から切り離すならば、記号は隠されたものを表すのではなく、内的なものの直接的現れであることになる。そのときラヴァーター観相学は、人あるいは事物の雰囲氣的な特徴や全体的な印象による個性を把握する学となる。拙稿「ラヴァーターにおける顔の記号学—ラヴァーター観相学の背景とその射程—」『シェリング年報』第19号、2011年および「ラヴァーター観相学の構想とその問題点」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第18号、2010年参照。

¹⁹ 「植物地理学の理念」(以下この著作をこのように略記する)は最初にフランス語で出版された。元の書名は次の通りである。*Essai sur la géographie des plantes; accompagné d'un tableau physique des régions équinoxiales, fondé sur des mesures exécutées depuis le dixième degré de latitude boréale jusqu'au dixième degré de latitude australe, pendant les années 1799, 1800, 1801, 1802 et 1803*. Paris, 1805. ここで主にわれわれが使用するの、このフランス語版をフンボルトがドイツ語で改訂したものである。ドイツ語版はフランス語版の単なる翻訳とは異なり、削除と補足追加がなされている。このドイツ語版は、次のハンノ・ベック編集のダルムシュタット版を用いる。Humboldt, Alexander von, *Ideen zu einer Geographie der Pflanzen nebst einem Naturgemälde der Tropenländer*, in: Alexander von Humboldt, *Schriften zur Geographie der Pflanzen*. Herausgegeben und kommentiert von Hanno Beck, Darmstädter Ausgabe, Band I, Darmstadt 2008. なおフンボルトのこのテキスト中に出てくる括弧[]はドイツ語による改訂の際のフンボルト自身の補足である。以下、この著作をIGPと略記し、参照箇所と引用箇所は本文中に頁数と共に記す。なお、特にフランス語版に言及する場合は、「植物地理学試論」と表記する。

大陸における赤道地域への旅行』の冒頭部分をなす。この著作は添付図と本文から成り、本文の前半は「植物地理学試論」、後半は添付図の解説である「熱帯地域の自然画」である。「植物観相学の理念」はフンボルト自身によって編集された著作『自然の眺望』²⁰に収められた重要な論文である。「植物観相学の理念」は、1806年1月30日にベルリンのプロイセン科学アカデミーで講演され、同年チュービンゲンで同じ題名で出版された。

「植物地理学の理念」と「植物観相学の理念」は密接に関係し、互いに補い合う著作である。ミヒャエル・ハーグナーによれば、この二つの著作は補い合って読まれねばならない。というのは、自然の美的把握と自然の科学的把握はフンボルトにあつては不安定な均衡のうちにあるからである。この均衡は、あるときは一つの側面を、またあるときは別の側面をより強く際立たせ、またさらにあるときは両者の間の同盟を強調することを可能にする。ハーグナーは、「植物観相学」においては、美的側面がより強調されていると見なす。観相学という概念によって、感性的次元が保証されるが、本質的に問題となるのは、植物地理学のための同じ材料である²¹。以下、まず「植物地理学の理念」を検討し、次に「植物観相学の理念」を検討する。

2.1 フンボルトの「植物地理学」

われわれはまず、フンボルトの「植物地理学」がフンボルトの自然探究にとっていかなる意味をもっていたかを確認しておきたい。フンボルトはフランス語版「植物地理学試論」の序で、「私がこの試論の中で考察したのは自然の全体(ensemble)である。」²²と述べている。ニコルソンが言うように、植物地理学は自然の全体を扱っている。なぜなら自然は特殊なものにのみ焦点を当てることによって理解されえないからである。自然は一つの全体論的統一である²³。また植物地理学は、普遍的な学としての一般自然学—自然の統一について語り、フンボルトにとっての自然探究の主要な目的であった—という大きな図式の内部に場所を占めるものであった。植物地理学は一般自然学へ向かう主要な道のうちの一つであった²⁴。さらにニコルソンによれば、フンボルトにとって植物地理学は自然科学と人間についての諸科学をつなぐ決定的なものであった。それは、すべての自然現象、それにまた美学と認識論を包括する、普遍的な学

²⁰ Humboldt, Alexander von, *Ansichten der Natur, mit wissenschaftlichen Erläuterungen*. Frankfurt am Main 2004. 『自然の眺望』は1808年に初版が、1826年に第2版が、1849年に第3版が出版されている。われわれが使用する書は、第3版に基づいている。以下、この著作を *Ansichten* と略記し、「植物観相学」はこの著作所収のものを用い、参照箇所と引用箇所はその略号を使って、本文中に頁数と共に記す。

²¹ Hagner, Michael, *Zur Physiognomik bei Alexander von Humboldt*, in: Campe, Rüdiger/ Manfred Schneider (Hg.), *Geschichte der Physiognomik. Text · Bild · Wissen*, Freiburg im Breisgau 1996, S.449. 山野正彦は、『自然の眺望』の本文における景観の相貌の表現は美的感動に充たされ、絵画的であるのに対し、『植物地理学考』の記述は、より科学者向けで、植物学と地理学の知識のふんだんに盛りこまれた内容となっている、と述べている。山野正彦『ドイツ景観論の生成—フンボルトを中心に—』古今書院、1998年、100頁参照。

²² Humboldt, Alexander von, *Essai sur la géographie des plants*, Paris, 1805, p.V. 残念なことにドイツ語版にはこの文章はない。

²³ Nicolson, M., Alexander von Humboldt, Humboldtian Science and the Origins of the Study of Vegetation, in: *History of Science*, Vol.25, 1987, p.176.

²⁴ Cf. *ibid.*, p.174.

に対するフンボルトのプログラムの内部に位置する中心的要素であった²⁵。

「植物地理学試論」はフンボルトにとって、科学的ならびに美的に、南アメリカの熱帯によって彼に刻まれた印象の全体性を含んだ作品であった²⁶。「植物地理学の理念」は、ハーグナーによれば、直観と測定、体験と実験、自然享受と自然支配をつなぎ合わせようとしている。その著作には、単に植生や動物の分布だけでなく、気候や海拔高度と農業との関係、気圧、重力、空気密度、大気の化学的および電気的關係および地質も属している²⁷。

フンボルトは、自然観察や測定の結果を、言葉で、もしくは数値を含む表や絵で表したものをいわば比喩的な言い方で「自然画」(Naturgemälde)と呼ぶ。これは具体的には論文や著書の形をとるが、文字通り画像の場合もある。彼は「植物地理学の理念」の序言で、観察された諸現象の主要な成果を一般的な絵(Bild)で要約することが諸科学にとって有益であり、この自然画は、彼が目下自然学者[=自然研究者]たちに敢えて提出しようとする著作である(Vgl. IGP, 43-44)、と述べている。そして、この自然画の中に地球の表面とその表面を包んでいる大気圏が提示するすべての現象がまとめられている(IGP, 44)。マイヤー・アービヒによれば、地上のいたるところで、自然を生きた全体へ、つまり「自然画」へつなぎ合わせているものは植物界である。したがって、熱帯の自然を自然画の中で捕まえようとする人は、その多様な植物の衣を自然の「様態」で全体論的に分節化することを始めねばならない。そのことをまさに行うのがフンボルトの植物地理学である²⁸。

さて、フンボルトのいう「植物地理学」は彼以前の植物学とどう異なり、またその新しさはどこにあるのであろうか。フンボルトは植物地理学について、「植物地理学はほとんど名前しか存在せず、地球の歴史にとってのきわめて興味深い材料を含む学問分野」(IGP, 48)である、と述べる。そして、これまでの植物学者の研究を次のように特徴づけている。「自然研究者[植物学者]の研究は、通常、植物学のごく一部を含む対象にのみ制限されている。彼らはほとんど新しい種の探索にのみ携わり、それらの外部形態(äußere Form)の記述や、それらの類似性によってそれらを綱(Klasse)や科(Familie)にくくる徴表にのみ携わっている」(IGP, 48)。植物地理学は、植物をさまざまな気候におけるその分布の関係によって考察する。このとき、フンボルトが目にするのは「植物被覆」(Pflanzendecke)である。この植物被覆は、フンボルトによれば、あるときはよりまばらに、またあるときはより密に織られており、剥き出しの地球の上にすべての生ける自然を繰り広げてきた。それは「植生」(Vegetation)を、永久氷河[万年雪]の空気の薄い高地から、海の底に至るまで、または岩[大地]の内部にまで追跡する。そこでは、地下の洞穴の中に隠花植物が生えており、それらはそれらを栄養源とする虫と同様にまだ知られていない(IGP, 48)。

ニコルソンが指摘するように、フンボルトの植物地理学は、外的な、目に見える植物の特色

²⁵ Ibid., p.167.

²⁶ Ibid., p.176.

²⁷ Vgl. Hagner, M., Zur Physiognomik bei Alexander von Humboldt, in: Campe, Rüdiger/ Manfred Schneider (Hg.), *Geschichte der Physiognomik. Text · Bild · Wissen*, Freiburg im Breisgau 1996, S.450.

²⁸ Vgl. Meyer-Abich, Nachwort zu "Alexander von Humboldt, *Ansichten der Natur*"(hrs., von Adolf Meyer-Abich), Stuttgart 1969, S.156.

を扱うだけでなく、それらの根底にある結びつきと関係を扱う。それは分類学的な植物学者の研究に基づくものではなく、また古い自然誌(natural history)とも違い、ヴィルデノウやフォルスターの植物相の研究とも違って、植物の集成的現象の研究、植生の研究であった²⁹。ここには、ニコルソンが指摘するように、18世紀に生じた知の転換がある。フンボルトの植物地理学の研究は、18世紀末の自然探究の多くの分野で生じた変化と性格において合致している。つまり、目に見えるものに過度に没頭するという古いやり方は、自然の根底にある有機的な凝集性、および隠されているにもかかわらず、その内部にある諸現象の関係を研究したいという、新たな欲求に直面して不十分なものとして次第に捨て去られることになった³⁰。

目に見えない、自然の文字通り根底にある現象の研究ということに関して言えば、フンボルトは植物地理学に対する彼の観念を、地球の歴史的研究と明白に結びつけている³¹。すなわち、植物地理学は地質学と密接に関連する。フンボルトは、たとえば次のように述べている。「近くにある大陸がかつて結合していたことについて決定するために、地質学者は海岸線の類似した構造、地層やその岩石の成層、そこに住む同じ人種や動物種、および隣接する海の浅瀬を根拠とする。植物地理学は少なからずこの種の研究に重要な材料をもたらすことができる。植物地理学は、東アジアがカリフォルニアやメキシコと共有している植物を考察する。植物地理学は、南アメリカが大地の上の有機的な萌芽の進化の前にアフリカから切り離されたこと、両大陸は、北極に対して、東岸と西岸とに関連していた、ということでありそうなことと思わせる。植物地理学を通じて、地球の最初期の状態を隠している、暗がりの中に押し入ることができる。その結果、カオス的な洪水によって乾いた地殻が多くの場所で同時に種々の植物種によって覆われていたのかどうか、あるいは(多くの民族の太古の神話によって)すべての植物の芽がまず或る地域で発育し、そこから解明するのが困難な方法で、また気候の相違にもかかわらず、すべての地方へ向かって移っていったのかどうか決定される」(IGP, 53)。

フンボルトの植物地理学は植物と人間の心情・気分および道徳との関係も扱う。この点にフンボルトの植物地理学の独自性が見られる。あるいはより一般的に言えば、フンボルトは、科学的な研究に審美的・道徳的な要素を伴わせたとと言ってもよいであろう。フンボルトによれば、自然に美しさを感じる人は、同時にまた幾つかの道徳的で美的な問題の解決をも見出すことをうれしく思う。フンボルトは、地上での植物の分布や植物の光景が、「民族の空想」や「芸術感覚」(Kunstsinn)に影響をもたらした、と考える。植物地理学は、たとえば、あれこれの土地の植生の性格はどの点にあるか、また何によって、植物界が観察者のうちに喚起する、「晴れやかな気分」や「厳粛な気分」の印象は変容されるのかを研究する。このような研究は、風景画や叙景詩に備わる、感動(Wirkung)を生み出す謎めいた手段とそれが直接に関連していればいるほど、ますます興味深いものとなる(Vgl. IGP, 61-62)。このような感動は植物が人間の精神に与える享受に関わる。フンボルトによれば、自然を大規模に観察するとき、平野や森の光景が与える享受は、或る有機的な物体の分解やその驚くべき構造の研究が生み出す享受とは本質的に異

²⁹ Cf. Nicolson, M., Alexander von Humboldt, Humboldtian Science and the Origins of the Study of Vegetation, p.175.

³⁰ Cf. *ibid.*

³¹ Cf. *ibid.*

なっている。後者では個々のものが知識欲を刺激し、前者ではいくつかの集団(Massen)が空想へと働きかける(Vgl.IGP, 62)。

われわれはフンボルトの自然観にドイツロマン主義の影響を認めてよいが、それは非常に微妙なものである³²。フンボルトはロマン主義的自然観を、「高次の自然画」としてシェリングに触れて述べている。経験的な自然研究の分野に忠実に、フンボルトは「植物地理学の理念」においても、多様な諸現象を、事物の本性的の中に入り込んでいくよりも、いっそう並列的(nebeneinander)に数え上げ、それらをその内的な協働(Zusammenwirken)の中で描いた、と述べて次のように書いている。「私が評価されるのを希望してよい立場を表わす、この告白は、同時にまた、いつかまったく別の、いわば高次の種類の自然画を哲学的に叙述することが可能であろう、ということと同時に示唆するはずである。すなわち、私がヨーロッパへ帰還する前にほとんど自分で疑っている、そのような可能性、すべての自然現象、すべての活動や形成体を対立した質料の根本諸力の決して終わりのない対立へそのように還元することは、今世紀のもっとも思慮深い人たちのうちの一人の大胆な企てによって根拠づけられた。シェリングの体系の精神をまったく知らないわけではない私は、真正の自然哲学的研究は経験的研究を害することがあり、永遠に経験論者と自然哲学者は、反目する両極として互いに反発し合う、といった見解から遠く隔たっている」(IGP, 44-45)、と。

フンボルトの植物地理学は、ゲーテの植物学の影響の下にある³³。フンボルトは次のように述べている。「植物地理学は、地球上の無数の植物の下に何らかの原形式(etwas Urformen)が発見されるのかどうか、特殊な相違が退化(Ausartung)の結果として、および或る原型(Prototypus)からの偏倚(Abweichung)として考察されうるかどうか、を研究する」(IGP, 53)。その際、フンボルトは「幾つかの根本形態」(einige wenige Grundgestalten)の必要を認める。フンボルトによれば、これらへ恐らくすべての他の植物は連れ戻されうるであろうし、それらは同様に多くの科や群を形成する。彼は、その研究が風景画家にとって特別に重要であるにちがいない、それら17の根本形態を挙げることで満足する(IGP, 62)。

フンボルトはこれらの根本形態として次の17の型³⁴を挙げている。

³² マイヤー・アービッチは、フンボルトとゲーテを、彼らの自然哲学において、シェリング主義者であった、つまり彼らは全体論の信奉者であった、と述べている。アービッチによれば、フンボルトは若いときの生気論から全体論へ進んだのであって、決して機械論へ進んだのではない。それは哲学的にも精神史的にも、唯一可能な発展の歩みである。Vgl. Meyer-Abich, Adolf, Nachwort zu "Alexander von Humboldt, *Ansichten der Natur*" (hrs., von Adolf Meyer-Abich), Stuttgart 1969, S. 163, 165.ニコルソンは、フンボルトにドイツロマン主義と自然哲学の背景を積極的に認める。しかし彼によれば、フンボルトは、たとえ美的感受性の特権や崇高なものへの訴えにいつでも敏感であったとしても、科学的合理性の成果を軽視する点でシラーやシェリングには従わなかった。Cf. M., Alexander von Humboldt, *Humboldtian Science and the Origins of the Study of Vegetation*, p.178, 180.

³³ マイヤー・アービッチによれば、フンボルトはゲーテの自然研究の完成者と見なされる。彼は、ゲーテと同じように普遍的な形態学者として思惟した。フンボルトの「植物地理学の理念」は、ゲーテの「植物のメタモルフォーゼ」と同じ種類の形態学である。Meyer-Abich, A., a.a.O., S.149.

³⁴ 山野正彦はフンボルトの植物の根本形態(相貌型)が、アメリカ旅行後の著作である「植物地理学の理念」の中ではじめて現れたことを指摘している。熱帯アメリカでの植物の全体印象が、フンボルトにこのアイデアを思いつかせた。この植物の相貌的分類は「植物観相学の理念」の中でもう少し異なっただけで現れている。山野によれば、この根本形態は全体の印象に基づいた生活型による区分が大部分であるが、一

1. バナナ型。2. ヤシ型。3. 木生シダ型。4. アロエ型。5. ポトス型。6. 針葉樹型。7. ラン型。8. ミモザ〔オジギソウ〕型。9. ゼニアオイ型。10. 蔓型。11. ユリ型。12. サボテン型。13. モクマオウ型。14. イネ型とアシ型。15. コケ型。16. 地衣植物型。17. カサキノコ型(IGP, 62-64)。

これらをフンボルトは「観相学的区分」(physiognomische Abteilung)(IGP, 64)とも呼んでいる。これらはフンボルトによれば、植物学者がいわゆる自然的な系統(natürliches System)の中で提出する区分とは相違する。フンボルトが提案する観相学的区分においては、植生の性格を規定し、したがって植物の光景とその群落が観察者の心に及ぼす影響を規定するものが問題となっている。そこで植物群落の相貌を、書物や温室においてではなく、自然そのものにおいて、その原生地において研究し、それを忠実にかつ生き生きと呈示することが、卓越した、教養のある芸術家に値する企てとなる。だからそれは感情豊かな芸術家[画家]の絵画的な対象ともなる(Vgl. IGP, 64)。

2.2 フンボルトの「自然の観相学としての植物観相学」

フンボルトの植物観相学の個別の内容を検討する前に、全体的なフンボルトの科学理解をいま一度確認しておこう。トーマス・リヒターによれば、フンボルトにとって科学は決して自己目的ではなく、上位の目標に奉仕するものと考えられている。この場合に問題となるのが、全体性であり、フンボルトが植物学という個別学問分野で再現しようとする自然の全体的叙述である。フンボルトはいつでも第一に、個々のものが従っている、大きな全体に注目している³⁵。その際、このような科学は、フンボルトにとっては同時に文学的叙述と一体である。フンボルトは『自然の眺望』第2版および第3版への序で、生き生きとした叙述によって自然享受を高めるといふ文学的目的と、科学の目下の状態に従って、諸力の調和的協働の洞察を増大させるという、純粋に科学的な目的の二つを『自然の眺望』が追究している(Vgl. *Ansichten*, 9)、と述べている。さらに、これに加えてフンボルトは自然の世界は道徳の世界へ影響すると考える。フンボルトは、「自然の世界の道徳の世界への影響—感覚的なものと超感覚的なものの神秘的な相互作用—は、より高い見地へと高められるならば、自然研究に、独自のまだあまり知られていない刺激を与える」(*Ansichten*, 247)、と述べている。

さてフンボルトにとって、自然はいたるところ生命に満ちているものである。自然の生命は、人間が鋭敏な感覚をもって科学研究を行うに応じて、その姿を現わす。フンボルトは自然の生命が人間に及ぼす影響である「印象」に注目する。その際、フンボルトは、科学研究と空想(Phantasie)を対立するものとは考えない。空想はむしろ科学研究を促進する。「植物観相学の理念」の冒頭で彼は次のように述べている。「活発な感覚を備えた人間が自然をくまなく研究したり、空想の中で有機的被造物の広大な空間を測定するとき、人間は多様な印象を受け取るが、

部には種による分類も含まれている。山野正彦『ドイツ景観論の生成—フンボルトを中心に—』古今書院、1998年、129頁参照。

³⁵ Vgl. Richter, Thomas, *Alexander von Humboldt: »Ansichten der Natur«. Naturforschung zwischen Poetik und Wissenschaft*, Tübingen 2009, S.97.

そのなかでも、あまねく広まった多くの生命が産み出す印象ほど深くかつ強力に影響を与えるものはない」(Anischten, 237)。この引用の中で「測定」という言葉を見落とすことはできない。フンボルトの自然研究は、印象を重視するが、他方ではそれは各種の器具による科学的な測定に伴われていた。エンゲルハルト・ヴァイグルによれば、フンボルト以前の学術探検家で彼ほど熱狂的に道具を使用した者はいない。彼は19世紀の初頭でおよそ手に入る学術上の道具装置を徹底して使用しているが、これほどの大規模な使用は今まで知られていなかった。フンボルトの構想の普遍性は、機器の普遍的な投入を必要とした。フンボルトの研究プログラムは、ヘルダー、ゲーテなどの全体性思考と近代の自然科学を結合させたものであった。そして、その核心においては、機器の製造における新しい発展段階と結びついていた³⁶。

フンボルトは「植物観相学の理念」の中で、或る地方、地域もしくは地帯を特徴づける「性格」や「全体的印象」を、「自然の相貌」として論じている。この自然の相貌は生命の現われであり、フンボルトにとっては特に植生として現われる。なかでも、フンボルトは熱帯の植物に魅了されていた。それは熱帯が生命の充溢している地域であるからである。

とはいえ、フンボルトは熱帯にのみ研究を限定したわけではない。地球上のそれぞれの地域には、それぞれ独特の相貌があり、また美がある。フンボルトは、極地から赤道にかけての各地域を、有機的力や生命の増大によって位置づける。「自然を一望でとらえ、地方的現象(Local-Phänomen)を抽象化する能力をもつ者は、極地から赤道にかけて、生命を鼓舞する気温の上昇とともに、次第に有機的力と生命の充溢が増大するのを知る」(Ansicht, 245)。しかし、この増大に際して、各々の「地帯」(Erdstrich)にはそれぞれ特有の美が保持されている。すなわち、熱帯には多様で多くの「植物型」(Pflanzenform)が、北方には牧場の眺めと春風の最初の息吹きによる自然の「周期的蘇生」(Wiedererwachen)が保持されている。こうして各々の地帯はそれ自身の特徴のほかにも、それぞれ特有の「性格」(Charakter)をもつ。フンボルトによれば、「有機組織」(Organisation)がもつ「根源的に深い力」(urtiefe Kraft)は個々の部分の変則的發展に何らかの自発性(Freiwilligkeit)を与えるにもかかわらず、すべての動植物の形姿(Gestaltung)を、確固とした、永遠に繰り返す「類型」(Typen)に縛りつけている。個々の有機体に一定の「相貌」(Physiognomie)が認められるように、記述的動植物学が、狭義の意味で動植物形態の解剖であるように、各々の地帯(Himmelsstrich)にもっぱら帰属する「自然の相貌」(Naturphysiognomie)が存在する(Ansichten, 245)。

フンボルトが使う「観相学」という概念は、ハーグナーによれば、美学と科学の結合を表わす語であり、フンボルトの植物観相学は、植物を風景の全体と結びつけ、全体印象と関係づける、植物の徴表についての学説である。この全体印象は、植物被覆がきわめて大きく関与する風景の相貌の結果である。植物学者が全体印象の個性化(Individualisierung)を遂行する方法をフンボルトは観相学と表わしている。そのことはリンネの種の分化に基づいて生じるのではなく、全体印象に寄与する、種々の植物の美的に分化可能な特性に基づいて生じる³⁷。

³⁶ Weigl, Engelhard, *Instrumente der Neuzeit. Die Entdeckung der modernen Wirklichkeit*, Stuttgart 1990, S.203, 216, 219.

³⁷ Vgl. Hagner, Michael, *Zur Physiognomik bei Alexander von Humboldt*, in: Campe, Rüdiger/ Manfred Schneider

フンボルトによれば、自然の相貌は、画家が描くことができるものである。そこでは感情が大きな役割を果たし、それは地方の全体印象を定めることに寄与する。「画家がスイスの自然、イタリアの空といった表現で表わすものは、この地方的な自然の性格の漠然とした感情(Gefühl)に基づいている。空の青、光の明暗(Beleuchtung)、遠方にたなびく霞(Duft)、動物の姿、樹液を含んだ草木、木の葉の輝き、山の輪郭、これらすべての要素が、ある一つの地方の全体印象(Totaleindruck)を定める」(Ansichten 245)。フンボルトがここで述べている自然の相貌としての「地方的な自然の性格の漠然とした感情」は、ゲルノート・ペーメがいう雰囲気当たるであろう。これは客観的に存在するものではなく、さまざまな要素から成る、観察者に現われている一つの全体的印象である。山野正彦によれば、フンボルトにおいて、相貌は「景観の印象として観察者に受け取られた像」を意味する。さらに山野は、フンボルトの記述の態度は、外界からの刺激を心に映し、さらにそれらの心的印象によって鋭敏にされた感覚、ことに視覚を再び外界に向けて投射し、呼応的に景観をとらえるものである、というすぐれた指摘をおこなっている³⁸。

フンボルトの植物観相学は単に植物形態を記述したり、分類したりすることに限定される学ではない。彼の植物観相学はもともと「自然の観相学」(Physiognomik der Natur)として構想されている。自然の観相学は、フンボルトによれば、個別的な自然記述とは異なる、「一般的な自然記述」(allgemeine Naturbeschreibung)である。フンボルトはこれを説明するのに、ゲオルク・フォルスターが旅行記や小著の中でなした描写、ゲーテが不朽の非常に多くの作品中でなした自然描写、ビュッフォン、ベルナルダン・ドゥ・サンピエールやシャトブリアンが無比の真実をもって個々の地方の性格についてなした描写を挙げている。こういった描写は、フンボルトによれば、たしかに心情にきわめて高貴な種類の享受を与えるのに適切である。だがそれだけではない。フンボルトにとってはそれ以上のことが問題である。種々の「地方」(Weltgegend)の「自然の性格」(Naturcharakter)についての知識は、「人類の歴史や文化」ときわめて密接に結びついている。というのは、たとえこの文化の曙(Anfang)が自然の影響によってのみ決定されてはいないとしても、「民族の性格」(Volkscharakter)、「暗さや明るさといった人間の気分」は相当な程度に、「気候の状況」(klimatische Verhältnisse)に依存しているからである(Vgl. Ansichten, 246-247)。ここに、自然環境が人間の性格、具体的には民族の性格を決定するという、いわゆる風土論の思想が見られるであろう。

すでにフンボルトの「植物地理学」を検討した際に明らかになったように、フンボルトの植物観相学³⁹で主に扱われるのは個々の植物の形態ではなく、集団としての植物の形態、植生、

(Hg.), *Geschichte der Physiognomik. Text · Bild · Wissen*, Freiburg im Breisgau 1996, S.445-446.

³⁸ 山野正彦『ドイツ景観論の生成—フンボルトを中心に—』古今書院、1998年、99、101頁参照。

³⁹ フンボルトの植物地理学は植物観相学として研究されたが、このフンボルトの植物観相学の特徴をマイヤー・アービヒは次のように述べている。いわゆる植物の「自然的な体系的分類」が、とりわけ生殖器官に根ざし、階層的に秩序づけられた植物群落の構造面(Baupläne)の形態学として証示されるとき、フンボルトの植物地理学はそれに対して、同様に階層的に互いの中に入り込む群落を形成する、植物の機能面(Funktionspläne)や環境との関係の別の「自然的な体系的分類」をわれわれに与える。フンボルトはこれを「植物観相学」と呼び、植物が外部に対して影響を及ぼし、能動的にその環境を形成する栄養器官によって関与している体系的分類を獲得している。Meyer-Abich, Adolf, Nachwort zu "Alexander von Humboldt, *Ansichten der Natur*" (hrs., von Adolf Meyer-Abich), Stuttgart 1969, S.156.

植物被覆である。フンボルトによれば、さまざまの「地方の性格」が、あらゆる外的諸現象に同時に依存しているとしても、また山の輪郭や「動植物の相貌」、あるいは空の青さ、雲の形や大気の透明度が、「全体印象」を生じさせるとしても、このような印象を主に決定づけているのが、「植物被覆」であることは否定しがたい。なぜなら、動物は、その個体の移動性とその僅少さによってしばしばわれわれの眼を免れ、集団としての量(Masse)を欠いているからである。それにひきかえ植物は、われわれの想像力に恒常的な大きさをもって作用する(Ansichten, 247)。

さてフンボルトによれば、他の多くのものがそれへと還元されるような、一定の「主要型」(Hauptformen)が知られる。この類型の決定にあつては、ある土地の「植生の相貌」(Physiognomie der Vegetation)は、(他の動機から生み出される植物の分類のように)小さな繁殖器官、すなわち花蓋、果実ではなく、その個別のもの美しさや分布や集団化に依存するので、「集団」(Masse)によって、ある地方の全体印象に個性を与えるところのものをのみ顧慮しなければならぬ(Ansichten, 248-249)。フンボルトによれば、16の植物型が主要に「自然の相貌」を決定している。フンボルトは、自分は両大陸を通じた旅行で、また北緯60度と南緯12度の間の種々の地帯の植生に多年にわたり注目してきたことで観察してきた植物型のみを数え上げている⁴⁰(Ansichten, 249)、と述べている。

フンボルトは地質学の研究から、自然の相貌が変化することも忘れていない。「地球の気温が、かなりの、恐らくは周期的に繰り返される変化を被ってきたとするならば、海と陸の関係が、それどころか大気の高さとその圧力さえもが同じではなかったとするならば、自然の相貌は、有機体の大きさと形態は同様にすでにさまざまに変化しているにちがいない」(Ansichten, 250)。

自然条件が異なるに応じて、民族の自然の享受が異なることをフンボルトは指摘している。フンボルトは北方の地域、特にヨーロッパの民族と南方の地域、特に赤道地域の民族の自然享受の違いについて対比的に論じている。フンボルトによれば、南方の地域に見られる多くの自然享受を、北方の諸民族はもたない。多くの天体、多くの植物形態、これらのまきにもっとも美しいもの(ヤシ、背の高いシダおよびバナナ、木生のイネ科植物および繊細な羽状のミモザ)は、彼らには永遠に知られないままである。しかし、北方の地域にはその「代償」(Ersatz)がある。その代償の豊かな源泉は、言語の育成において、「詩人の燃えるような空想」において、「画家の描写技術」において開示されている。その源泉から、北方地域の人間の想像力は異国の自然(exotische Natur)の生き生きとしたイメージを汲み取る。こうして、寒い北方において、荒野において、孤独な人間は、きわめて遠い土地で究明されるものを我がものにすることができるのである(Vgl. Ansichten, 260-261)。このことをフンボルトは、「彼の内面で、精神と同様に自由で不滅の、彼の精神の作品である、一つの世界が生み出される」(Ansichten, 261)、と述べている。以上の叙述とほぼ同じ指摘はすでに『植物地理学の理念』でもなされていた。最後にこれを挙

⁴⁰ 当然フンボルトが挙げている植物型が地球上のすべての植物を尽くしているわけではない。植物型の数は暫定的であり、フンボルトに知られた地方に依存している。フンボルト自身においても、「植物地理学試験」では植物型の数は17と変動している。別の地域も考慮されるときには、数は容易に増える。Vgl. Hagner, Michael, Zur Physiognomie bei Alexander von Humboldt, in: Campe, Rüdiger/ Manfred Schneider (Hg.), *Geschichte der Physiognomie. Text · Bild · Wissen*, Freiburg im Breisgau 1996, S.446.

げておこう。

フンボルトによれば、熱帯の住民は、すべての植物形態の光景を享受している。大地はその住民に、極から極へ星でいっぱいの天蓋が彼の輝く諸世界のいかなるものも隠さないように、一度にそれらすべての多様な姿を開示する(IGP, 65-66)。ヨーロッパの諸民族は、この特権を享受していない。多くの植物形態は彼らには永久に知られないままである。しかし、「言語の豊かさや文化」のうちに、「詩人や画家の生き生きとした空想」のうちに、ヨーロッパ人たちは満足はいく代償を見出す。模倣芸術の魅力は、彼らを地球のもっとも遠い部分に置き入れる。その感情がこの魅力にとって活発であり、自然をそのすべての活動のうちに包むのにその精神が開花している、そういう人は、荒野の孤独の中で自分にいわば「内的世界」をつくりだす。つまり、彼は、自然研究者の大胆さ、すなわち海を横断したり、空中を飛行したりして、氷で覆われた山の頂上や地下の洞穴の内部で発見したものを我がものとする(Vgl. IGP, 66)。

フンボルトの自然研究は、全体としての世界の洞察を目指していた。そして、その洞察は人間に精神的享受と内的自由を与えるものであった。フンボルトは、「かくして世界有機体(Weltorganismus)の洞察は、いかなる外部の力によっても、運命がくり出す打撃の下にあって破壊されない、精神的享受と内的自由を生み出す」(IGP, 66)、と述べている。

3. 終わりに

われわれは今日アレクサンダー・フォン・フンボルトから何を学びうるであろうか。フンボルトには、自然を壮大なスケールで捉えようとする、現代人には失われた視点がある。たしかに現代では一人の人物が自然科学と人文科学の両面にわたる多くの学問分野に通暁することは不可能であろう。しかしながら、自然を全体として捉えようとするフンボルトの全体的観点は今日でもわれわれに示唆するところが多い。その際、フンボルトにおいては、ハーグナーの言うように、自然直観の感覚的享受と自然の知との関係はつねに緊張を帯びている⁴¹。

フンボルトにとって、自然の相貌(都市景観は意図的に度外視する)とは、分節化して述べれば、或る地域の諸事物—空、海、海岸、山の輪郭、野原、森、木の葉の輝き等々—が人間の感覚を刺激し、その刺激に応じて励起された感覚によって、人間に一つの全体的印象として、独特の雰囲気として産み出されるものである。もちろん、ここで二つの出来事が同時に生起していることは言うまでもないが。フンボルトはこの全体的印象を産み出すものとして特に植生を重視した。

フンボルトの自然の観相学としての植物観相学は、今日の環境倫理に自然の全体的観点を取り戻させることに寄与するであろうし、自然の美的享受に関しては自然美学の構想に大きな示唆を与えるであろう。

⁴¹ Hagner, Michael, Zur Physiognomik bei Alexander von Humboldt, in: Campe, Rüdiger/ Manfred Schneider (Hg.), *Geschichte der Physiognomik. Text · Bild · Wissen*, Freiburg im Breisgau 1996, S.449.

文献表

邦訳のある文献は訳を参照させていただいた。また邦語文献の中に出てくるアレクサンダー・フォン・フンボルトの文献の訳で参考にしたものがあることをお断りしておきたい。

植物地理学ならびに植物観相学に関連するアレクサンダー・フォン・フンボルトの著作

Humboldt, Alexander von, *Schriften zur Geographie der Pflanzen*. Herausgegeben und kommentiert von Hanno Beck. Darmstädter Ausgabe, Band I, 2008.

Humboldt, Alexander von, *Essai sur la Géographie des Plantes*, Paris, 1805.(フンボルト、手塚章訳「植物地理学試論」(部分訳)、手塚章編『地理学の古典』(古今書院、1991年)、所収)

Humboldt, Alexander von, *Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse*, in: *Ansichten der Natur*, Frankfurt am Main 2004.

Humboldt, Alexander von, *Ansichten der Natur*, Herausgegeben und kommentiert von Hanno Beck. Darmstädter Ausgabe, Band V, Darmstadt 2008.

Humboldt, Alexander von, *Ansichten der Natur*. Herausgegeben von Adolf Meyer-Abich, Stuttgart 1969.

Humboldt, Alexander von, *Kosmos. Entwurf einer physischen Weltbeschreibung*. Herausgegeben und kommentiert von Hanno Beck. Darmstädter Ausgabe, Band VII/1, Darmstadt 2008.

アレクサンダー・フォン・フンボルトに関連する研究書

馬場喜敬「アレクサンダー・フォン・フンボルト—主として「自然の景観」をめぐって—」『東京家政大学研究紀要』第35集(1)、1995.

Böhme, Gernot, *Atomosphäre. Essays zur neuen Ästhetik*, Frankfurt am Main 1995.

Böhme, Gernot, *Ästhetik. Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre*, München 2001.(ゲルノート・ベーム、井村・小川・阿部・益田訳『感覚学としての美学』勁草書房、2005年)

Botting, Douglas, *Humboldt and the Cosmos*, London, 1973(ダグラス・ボッティング、西川治・前田伸人訳『フンボルト—地球学の開祖』東洋書林、2008年)

Hagner, Michael, *Zur Physiognomik bei Alexander von Humboldt*, in: Campe, Rüdiger/ Manfred Schneider (Hg.), *Geschichte der Physiognomik. Text · Bild · Wissen*, Freiburg im Breisgau 1996.

栗林澄夫「科学的思考と芸術の結びつき—アレクサンダー・フォン・フンボルトにおける自然と人間—」、『大阪教育大学紀要 第1部門』第50巻、2002年

Meyer-Abich, Adolf, *Alexander von Humboldt*, Hamburg 1967.

Meyer-Abich, Nachwort zu “Alexander von Humboldt, *Ansichten der Natur*”(hrs., von Adolf Meyer-Abich), Stuttgart 1969.

西川治『地球時代の地理思想—フンボルト精神の展開—』古今書院、1988年

野間三郎『近代地理学の潮流—形態学から生態学へ—』大明堂、1963年

Nicolson, Malcolm, Alexander von Humboldt, Humboldtian Science and the Origins of the Study of Vegetation, in: History of Science, Vol.25, 1987.

大森道子「アレクサンダー・フォン・フンボルトとゲーテ—Physiognomik をめぐって—」『モルフォロギア』第2号、1980年

Pfeiffer, Heinrich(hrsg.), *Alexander von Humboldt, Werk und Weltgeltung*, München 1969.

Richter, Thomas, *Alexander von Humboldt: »Ansichten der Natur«. Naturforschung zwischen Poetik und Wissenschaft*, Tübingen 2009.

田村百代「アレクサンダー・フォン・フンボルト「自然画」における科学と芸術」、『地域研究』(立正地理学会)、35巻、1995年

手塚章編『地理学の古典』古今書院、1991年

Weigl, Engelhard, *Instrument der Neuzeit. Die Entdeckung der modernen Wirklichkeit*, Stuttgart 1990(エンゲルハルト・ヴァイグル、三島憲一訳『近代の小道具たち』青土社、1990年)

山野正彦『ドイツ景観論の生成—フンボルトを中心に—』古今書院、1998年

*本研究は科学研究費補助金(基盤研究(C))(課題番号 21520017)の助成を受けたものである。